

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25284053

研究課題名(和文) ブレイクの複合芸術における「手」 医学的、ジェンダー的研究

研究課題名(英文) The Hand in Blake's Composite Art

研究代表者

今泉 容子 (IMAIZUMI, Yoko)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：40151667

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究が対象としたのは、イギリス・ロマン主義期の詩人・画家・彫版画師ウィリアム・ブレイク(William Blake)の「彩飾詩」(Illuminated Poetry)とよばれる複合芸術の全作品であった。研究目的は、彼の作品に頻出し、擬人化までされた「手」の意味を、18世紀の医学的ディスコースに関連づけながら、また同時代のゴシック文学における「手」の描写と比較しながら、解明することであった。

本研究の独創的な点は、ブレイク作品に描かれた「手」の意味が「変化していくプロセス」を明らかにして、従来のブレイク研究ではすっぽりと抜け落ちていた「セクシュアルな手」の存在を明らかにするところにあった。

研究成果の概要(英文)：This project was designed to examine the meaning of the "hand" in William Blake's illuminated poems against the backdrop of the medical and sexual discourses which were prominent in 18th-century England. It successfully clarified what can be called the "gendered hand" which had remained unexamined since the dawn of Blake studies.

研究分野：人文学 文学 英米・英語圏文学

キーワード：ブレイク 複合芸術 手 医学 ジェンダー 18世紀 英国

1. 研究開始当初の背景

本研究が対象とするのは、イギリス・ロマン主義期の詩人・画家・彫版画師ウィリアム・ブレイク (William Blake) の「彩飾詩」 (Illuminated Poetry) とよばれる複合芸術の全作品であった。研究目的は、彼の作品に頻出する「手」の意味を解明することであった。

ブレイク自らが「彩飾詩」と名づけた一連の複合芸術作品 (詩 + 絵が合体した芸術) において、「手」は熱っぽく、力をこめて描かれている。ブレイクは手にこだわった。多くの詩行に「手」 (hand) という語を登場させただけでなく、後期の彩飾詩になると、「ハンド」 (Hand) という名の擬人化された男まで登場させたのである。

しかし、ひとつの問題があった。解明されてきた「手」が、ブレイクの「手」の全体像ではなく、一面だけに限定された、という問題であった。解明された「手」は、「男の手」と呼びうるものである。ブレイク研究を飛躍的に発展させたディヴィッド・アードマン (David Erdman) の『ブレイク、帝国に反逆する予言者』 (*Blake, Prophet Against Empire*, 1954 年) も、難解なブレイク作品の用語を解き明かした S・フォスター・デイモン (S. Foster Damon) の『ブレイク辞典、ウィリアム・ブレイクの思想と象徴』 (*A Blake Dictionary: The Ideas and Symbols of William Blake*, 1965 年) も、「手」を男の登場人物に結びつけて論じたのだった。

たしかに、ブレイク本人が擬人化した「ハンド」を男に設定したのであってみれば、「手」を男と結びつけて解釈するのは、とうぜんかもしれない。しかし、ブレイクの彩飾詩が『ヨーロッパ』『アメリカ』から、『ユリズンの書』『アヘイニアの書』『ロスの書』をへて、『四ゾア』 (未完) や『ミルトン』『ジェルサレム』へと進展するにつれ、「男 vs 女」の葛藤はますます激しくなり、特異な「女の手」が登場するようになったのだ。この「女の手」を無視したのでは、ブレイク複合芸術における「手」は理解できない。

この認識から、本研究は出発し、従来のブレイク研究から抜け落ちていた「女の手」の意味を考察したうえで、ブレイクの象徴体系における「手」の全体像を明らかにしようと

したのである。

「女の手」は男を誘惑したり男に抵抗したりするセクシュアルな手である。そうした「女の手」は、ブレイク複合芸術においてどのように形成され、どのような変容をたどったかを、ブレイクの彩飾詩の作品群を考察対象として、解明しようとしたのである。

そのさい、ブレイクが生きた 18 世紀後半 ~ 19 世紀前半の思想・心理の環境を重視したい。とくに、ブレイクの「手」に影響を与えた環境のうち、(1) 解剖学の「手」のディスコース、(2) ゴシック文学の「手」のディスコース、という二つの環境に照らし合わせながら、ブレイクの「手」を解析したい。

2. 研究の目的

ブレイク本人が擬人化した「ハンド」は、たしかに「男」に設定されている。それを考慮すれば、ブレイク複合芸術における「手」は「男の手」として考察されうるし、じっさいブレイク複合芸術においても、「男の手」は重要な意味を与えられている。しかし、ブレイクの彩飾詩が初期から後期へとうつるにつれて、男と女の葛藤は激しくなり、「女の意志」 (Female Will) と呼ばれる存在が登場するようになったのである。この「女の意志」が武器として用いるのが、自分たちの「手」、すなわち「女の手」である。この「女の手」を無視しては、ブレイク複合芸術における「手」の全体像は理解できない。

本研究の目的は、ブレイク複合芸術における「女の手」の意味を解明することに大きな比重を置くことになった。すなわち、「女の手」が突き出される方向には何が存在し、「女の手」は何のために用いられるかを分析することが、本研究の主たる目的となったのである。さらに言えば、そうした「女の手」は、ブレイク複合芸術においてどのように形成され、どのような変容をたどったかを、ブレイクの彩飾詩の作品群を考察対象として、解明していくことが、本研究の目的だったのである。

3. 研究の方法

「女の手」がブレイク複合芸術においてどのように形成され、どのような変容をたどったかをブレイクの彩飾詩作品群のなかに検出するさい、ブレイクが生きた18世紀後半～19世紀前半の思想・心理の環境を重視する方法をとった。とくに、ブレイクの「手」に影響を与えた環境のうち、(1)解剖学の「手」のディスコース、(2)ゴシック文学の「手」のディスコース、という二つの環境に照らし合わせながら、ブレイクの「手」を解析していった。

ブレイクの彩飾詩の全作品に見られる「女の手」がどれほど独創的なものであったかを明らかにするうえでも、18世紀の医学(とくに解剖学)とジェンダー観の視点を導入することは有意義であった。

18世紀医学関連の一次資料を入手し、ブレイクと医学の結びつきを可能な範囲で考察する方法をとった。ブレイクのSpurzheim著*Observations on Insanity*への欄外書き込みや、出版者ジョゼフ・ジョンソン(Joseph Johnson)経由で読んでいたジョン・ブラウン著『医学入門』(*Elementa Medicae*)の英語訳本(1788年)など、比較的容易に本研究に取り入れることができるものを利用する方法をとった。

また、同様に、ブレイクと同時代の多くのラディカルな書物のうち、ジョンソン経由でブレイクが接していたと推察できるゴシック文学/エロティック文学も本研究に取り入れて、「手」の描写に関してブレイクのそれと比較する方法をとった。

ブレイクが生きた時代は、まさに「解剖学」が花開いた時代であり、またゴシック文学/エロティック文学がさかんに出版されていた時代であったため、そうした環境にブレイク複合芸術を置いて、ブレイクの特異性をきわだたせようとする方法をとったのである。

本研究において、とくに力点を置いて明示したことは、初期作品から後期作品へ移るにつれて、ブレイクの「手」に込められた意味が「変化していく」ということであったが、「男の手」から「女の手」へと徐々に重点が移行したことが、とくにジェンダーのパスペクティブの導入によって明らかにできた。

4. 研究成果

本研究の大きな成果は、ブレイク複合芸術において重要な役割を担う「手」を「男の手」と「女の手」に分けたうえで、従来考察されなかった「女の手」に重点をおきながら解明したことであった。

ブレイク複合芸術においては、初期から後期にいたるにつれ、男女の葛藤がだいにクローズアップされていく。そして、ついには「女の意志」(Female Will)とよばれる女たちが多数出現して、男を支配し、世界を支配する。その過程で、男を魅惑し支配するために、また男を拒絶し対抗するために、「女の手」が活躍することになるのである。

「男の手」のほうは、女とは無関係なシーンに出現する。たとえば、『ユリズンの書』で男ユリズンは人類を支配するための規律書を作成するが、自分の両手を同時に動かして二冊の本をせっせと書き進めている。『ミルトン』では男ミルトンが未知なる暗黒界に分け入るとき、通常のプロポーションを超えた巨大な右手を突き出しながら前進していく。このように、「男の手」は彼自身のために使われる。

しかし、「女の手」は、男がいてこそ出現することを、本研究は明らかにした。たとえば『アメリカ』では、女ヴェイラの手は、男アルビオンを虜にする術をかけようとして、彼に向かって突き出される。周囲の環境も彼女を支援するかのようになり、大木はその大きな枝を女の腕とほぼ平行に伸ばしている。『ジェルサレム』のタイトルページで女ヴェイラは、『ユリズンの書』の男ユリズンと類似したポーズで座り、彼と同じように両手を左右に伸ばしているが、男(ユリズン)が「両手」で二冊の本を書いているのに対して、女(ヴェイラ)は「両手」で左右の男たちの頭を掴もうとする。掴まれた男のほう(向かって右)の「手」は、描かれていない。自分の意のままに使える「手」がない男は、男女の抗争において敗北していく。

こうした男を魅惑・支配しようとする「女の手」は、ブレイクの表象体系の重要な柱のひとつになっていることを、本研究は分析した。本研究の出発点には、そうした従来の研究が「男の手」に集中し、「女の手」が十分に研究対象にされてこなかったことへの反省があった。そのブレイク象徴研究の未開拓

の領域に切り入って、ブレイクの「手」の全貌を明らかにしようとした点に、本研究の獨創性がみとめられよう。

ブレイク複合芸術作品においては、初期から後期にいたるにつれ、男女の葛藤がしだいにクローズアップされていったことも、本研究によって明らかにできた。とくに後期の作品において「女の手」が重要な役割を果たすようになり、その「手」を自在に繰るのが「女の意志」(Female Will)とよばれる女たちであることが明らかにされたため、それらの「女の意志」と呼ばれる存在を解明したものとしても、本研究を位置づけることができる。

「女の意志」とよばれる女の登場人物たちは、後期の作品になるにつれて多数出現するようになり、男を支配し、世界を支配するようになる。そうした「女の意志」そのものの研究も、今後、発展させることができよう。

最後に、本研究の成果として、二つの領域において別々の研究がなされがちなブレイク研究を、ひとつの統合された研究として実践したこともあげられよう。具体的にいえば、(1)「手」が記された「詩文」の研究をおこなう文学研究と、(2)「手」が描かれた「絵画」の研究をおこなう美術研究を、ひとつの研究のなかで統合したことである。ブレイク複合芸術の初期作品から後期作品にいたるまで、詩へのアプローチと絵へのアプローチをいっしょに行うことによって、ブレイク作品を「詩+絵」の「総体」として解釈する立場を貫いたものが、本研究であった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

- (1) Ima-Izumi, Yoko, “The Female Hand in Romantic Literature and Film,” *Proceedings, 2015 Hawaii International Conference on Arts and Humanities* (Honolulu, Hawaii: HICAH Committee, 2015), pp. 459-471. ISSN#1541-5899 査読有り

〔学会発表〕(計 2件)

- (1) Ima-Izumi, Yoko, “The Female Hand in Romantic Literature and Film,” Hawaii International Conference on Arts and Humanities, Hilton Hawaiian Village Waikiki Beach Resort, Honolulu, Hawaii, U.S.A., January 11, 2015. 査読有り
- (2) 今泉容子, 「<女の手>の芸術表象 W.ブレイクからE.ブロンテへ」, 日本英文学会 65 回中部支部大会、於：椋山女学園大学星ヶ丘キャンパス(愛知県名古屋市) 2013 年 10 月 5 日。査読有り

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今泉 容子 (IMAIZUMI, Yoko)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：40151667